



Title	The Postcolonial Condition of East Asian International Relations: Mindanao, Okinawa and the United States Hegemony
Author(s)	Untalan, Carmina Yu
Citation	大阪大学, 2020, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/103247">https://hdl.handle.net/11094/103247</a>
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

### Abstract of Thesis

Name	( UNTALAN CARMINA YU )
Title	<p>The Postcolonial Condition of East Asian International Relations: Mindanao, Okinawa and the United States Hegemony          (東アジア国際関係のポスト・コロニアル状況：ミンダナオ、沖縄、そして米国のヘグモニー)</p>
<p><b>Abstract of Thesis</b></p> <p>Drawing from the cases of Muslim Mindanao and Okinawa and their involvement in the U.S. foreign policy in East Asia, this research argues that colonial relations are constitutive components of American hegemonic order, and transitions in East Asian. It claims that re-thinking East Asian international relations (IR) from the perspective of the subaltern shows how the reactivation of the colonial condition of subalterns Mindanao and Okinawa are linked to the construction and reproduction of the American hegemonic order in East Asia. Challenging the state-centric approach of prevailing IR literature on East Asian International Relations (IR) I propose the framework of the triptych of hegemony that comprise of the hegemonic core, ally states and the subaltern. It utilizes comparative approach that combines a Gramscian interpretation of hegemony to analyze stasis amidst change, with postcolonial analysis to examine the colonialist structure that informs the American hegemonic system in East Asia. I analyze how bifurcated U.S. colonial policies in Philippines and Mindanao and military occupation of Japan and Okinawa reinforced the existing unequal relations in the Philippines and Japan. It concludes that a viable post-hegemonic, decolonized order in East Asia relies not on hegemonic transitions between states or on strengthening American alliance system in the region especially with Japan, but from overturning the subaltern subordinate status.</p>	

## 論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (Untalan Carmina Yu)		
	(職)	氏 名
論文審査担当者	主査	教授 松野明久
	副査	教授 中嶋啓雄
	副査	准教授 松田ヒロ子 (神戸学院大学現代社会学部)

### 論文審査の結果の要旨

この博士号請求論文は、東アジアの国際関係を規定してきた米国のヘゲモニーの歴史的起源とその展開を辿り、そこにみられる植民地主義的関係が今日主流を成す国際関係の議論の枠組の中で見えなくなっている現状を批判的に論じたものである。具体的には、ミンダナオと沖縄が19世紀にそれぞれ米国と出会いつつ、フィリピンと日本の国民国家形成に組み入れられる中で、周縁にある内なる他者として固定される過程を比較の視点で描き出す。そして、その過程において米国の同盟国（フィリピンと日本）とその周縁（ミンダナオと沖縄）に生起した抵抗と受容の両面を、グラムシのヘゲモニー概念に依りつつ、ポストコロニアル研究の視点から説明する。本論文の学術的貢献は、通常は国内問題とされる現象を国際関係論の中心的问题として扱うという認識論的転換の必要性を主張し、その可能性を具体的な事例で論証したことにある。その今日的意義は、中国の台頭によって変化する東アジアの秩序に国民国家の内部構造（中心と周縁）が孕むダイナミックスが影響を与えることを示唆した点にある。

問題と方法論、依拠する概念をIntroduction: The Tale of Two Islandsで述べた後、第1章 (Rethinking Hegemony) では、まず先行研究の検討を行い、東アジアにおける米国のヘゲモニーは第二次世界大戦後、冷戦期の安全保障体制に由来するとする通説に対して、それは19世紀の両者の植民地主義的な出会いに始まるとして主張する。そして米国・同盟国・周縁（またはサバルタン）の水平的関係をトリプティカ（三枚の祭壇用聖画像）に模して描くことで、（国内の）周縁を国際関係の一構成要素として論じる概念的見取り図を示す。

第2章 (The Other White Man's Burden) ではミンダナオの米国との出会い、そのフィリピンの国民国家形成史における周縁化あるいはサバルタン化の過程を描きつつ、フィリピンのナショナルエリートがミンダナオを内なる植民地としていた歴史を浮き彫りにする。米国は、キリスト教化した北部とイスラム化した南部を異なる社会とみなし、別々に関係を構築し、北部に南部を支配させることでミンダナオが米国に従属する構造を維持してきたと論じる。

第3章 (The Colony that Never Was) では沖縄と米国の出会い、その日本の国民国家形成史における周縁化あるいはサバルタン化の過程を描きつつ、日本のナショナルエリートが沖縄を内なる植民地としていた歴史を浮き彫りにする。米国は、本土と沖縄を異なる社会とみなし、別々に関係を構築した上で、本土に沖縄を支配させることで沖縄が米国に従属する構造を維持してきたと論じる。

第4章 (A Hegemonic System Without Subalterns?) では、ミンダナオや沖縄のサバルタン化は米国がヘゲモニーをもつ東アジアの国際関係の構造に由来し、したがってこの問題はまさしく国際関係論の射程にある問題だと主張する。また、ミンダナオと沖縄が組み込まれた相似の構造と両者の差異についても論じている。国際関係を論じる主たる枠組は依然として国家間の関係であり、国内問題は無視されるか忘れられており、東アジアの国際関係の構造を把握する上では重大な欠落であると述べる。

結論では、議論を総括しつつ、残された課題に触れている。それはミンダナオや沖縄をサバルタンと見ることでその存在を「抵抗者」の役割に還元ないしは矮小化してしまう恐れがあることである。そして、彼らの真の主体性はいかに構想されるのかという問題が次に論じられなければならないとする。

本論文は政治学、歴史学、文化人類学、ポストコロニアル理論など多様な分野の文献から事実や見解を集め、緻密に議論を構築した労作であり、その主張は独創的である。ヘゲモニー概念の多義性を踏まえた上での本論文におけるより厳密な規定、批判している国際関係論で主流となっている議論との関係のより明確な説明など、いくつか課題が見いだされるものの、審査委員会は一致してこの論文が博士（国際公共政策）の学位を授与するに値すると認定した。